
平成 22 年度卒業研究発表会要旨集の巻頭にあたって

石川翔一 (筑波大学 生物学類 4 年)

卒業研究発表会は、もはや生物学類にとって欠くことのできない行事として認識されていると思います。また、四年生にとっては生物学類で学んだことの集大成を披露する場でもあります。そのような卒業研究発表会の主役として、多くの方々の前で研究内容を発表できるということに、大きな喜びを感じております。

一年生の時に初めて見学した卒業研究発表会を振り返ってみますと、自身の知識不足のために先輩方の研究内容を理解することが難しかったことを覚えております。それでも、一連の研究を構築し、そこで得られた知見を堂々と発表する先輩方を目前にし、漠然とした凄さを感じました。同時に、そのような立派な研究を遂行するだけの能力を自分も習得できるのだろうかという不安も抱きました。二年生、三年生となるにつれて研究内容を理解する能力は向上しましたが、それでも前述の不安は依然として抱いたままでした。

そのような心持ちのまま気付けば四年生となり、卒業研究を行う身となりました。私にとってのこの一年間はまさに失敗ばかりの日々で、研究の難しさを痛感させられる一年間でした。上手くいくことはほんの時々でして、一つのデータを導き出すことにいかに多大な労力を費やさなくてはならないかを思い知りました。

そんな試行錯誤の日々を送る中で、「研究とは特別な人にもみ開かれているものではない」ということに気付きました。自身で問題点を見抜き、対処していく内に「自分にも研究が出来ている」と実感しました。未だ至らない点ばかりの私ですが、このようなことに気付いてから、かつて抱いていた研究を遂行することに対する不安が払拭されたように思います。

私事ばかり書き連ねてしまいましたが、とにもかくにも私たちが無事に生物学類での四年間を過ごし、このような素晴らしい卒業研究発表会を迎えることが出来たことは、偏に生物学類の先生方の篤い御指導の賜物であると実感しております。この場を借りまして深く御礼申し上げます。また、卒業研究発表会の準備・運営に尽力して下さった三年生をはじめとする皆様、本当にありがとうございました。最後に、一・二年生の皆様につきましては、今後研究室を選択する際に、私たちの発表がその一助となれば幸いです。

Communicated by Kensuke Yahata, Received February 9, 2011